

『モノトーンな時代』

山口恭弘

去る者は追わず、来る者は拒まず、現役の頃はそんな心情で生き抜いて来た。又、去る者は日々々に疎し、と云う気持を抱くのは昨今の、旅立たれた方や音信不通になった方々への思いである。

此の題名が気に入って居るので久しぶりに書いて見る、とすると否、もっと違うんではないか、自問自答して仕舞う。が、書き足りないならば続けければ良しとす可し！の気持が勝った。そんな思いは初めの頃と余りは変らないが「春夏秋冬」では短編を二作ほど残した後、続けることが大事だと気付く。すると小説風な自分史にするかと、勝手にきめた。此れならば子供の頃の拙い日記やらを基にしてそれと記憶の臭味が忘れ去らない中に、思う存分書き続けられる高揚感を沸かせた。自分でも驚くのだが二十年強続けられた。それ丈で終了とはどうしても割り切れない残火の様なもの心の隅みにあったのだらうか。

二〇一七年七月「春夏秋冬」夏の号第86号で季刊雑文同人誌は閉刊したが、『モノトーンな時代』（その八十二）で、音信不通となつてしまった友人のことを会者定離なのかと書いて居る。自分は今も引摺り込んだまゝの気持はその号を（未）として居た、が何と刷り上りは（未）となつて居た。あゝ此れも真也、と半ば気が失せてしまった。

果たして士気が高揚するか、末となつてしまったのを振出しに戻せるか分らないが、筆を取る気になつたのは「来る者を拒まず」の心持ちになつて居るに違いない。二年前の夏に再三「発行人を継ぐものは居りませんか」とK氏が声を掛けていたが、「何方も現れなかつたよ」と。「俺はその器ではないからな」とグラスを傾け、「百号を目指したいね」と云っていた頃とは全然違ふ口振りが残念至極だな、と思つたことを覚えて居る。校正は居酒屋のスタンドで行なつた。海老名駅近くの焼鳥屋で一時間程の軽い打合せで切上がった。それは小生の原稿のみであつたので早い訳である。

五年位続いたが、第86号の一年前頃「もうくたびれたよ、老人会の会長も辞めたし、此の同人誌も辞めたい」なんて口走るようになった。

「此処のつくね旨いな、なあ、タレがいゝし」と話題を変えるがよしと思つた。

振り返つて見れば彼が眼を輝かせて話して居たのは何時の頃だったのか、発行号数が半分位の時、創刊以来印刷を行なつていた野村工画が閉鎖され次の印刷屋さんを探したり、各種団体の総会に出席、司会、会計監査報告やらで大変忙しくして居たな、然も独りで決めて動き廻わつて居る様子が伝わつた。まあその中、連絡が入るかも知れない、その時は又エビナ辺りで一献行くとするか。K氏とは「去る者」ではないと思つて居る、目下充電中と解釈する次第也。

(続く)